

鈴木みどり先生逝去15年に思うこと

内田, 幸一

(出版者 / Publisher)

法政大学図書館司書課程

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Journal of Media and Information Literacy / メディア情報リテラシー研究

(巻 / Volume)

3

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

36

(終了ページ / End Page)

39

(発行年 / Year)

2021-11

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025519>

法政大学図書館司書課程

メディア情報リテラシー研究 第3巻1号、036-039

特集 「鈴木みどりとメディア・リテラシー研究：今日的意義、そしてこれから」
——思い出——

鈴木みどり先生逝去15年に思うこと

内田幸一

鈴木みどりゼミ3期生

鈴木みどり先生がご逝去されてから15年が経った。時の流れを感じざるを得ない。鈴木先生のメディア・リテラシーにおける功績については他の方々が論じられていると思うので、本稿では鈴木先生との思い出を振り返りたい。

私がメディア・リテラシーと出会ったのは1997年の立命館大学産業社会学部入学に遡る。1回生時のクラスの担当教官が鈴木先生という、まさに偶然ともいえるものだった。当時の私は、将来新聞社やテレビ局といったメディア関係の仕事に就きたいという漠然とした思いから同大学・学科を選んだ。鈴木先生によって教えられた「市民がメディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価する」というメディア・リテラシーの概念は、「新聞やテレビが報じているものは正しい」と無批判に受け入れていた20歳手前の私には大いに興味深く映った。

メディア・リテラシーの授業で新聞やテレビニュース、CMの数量分析や映像分析を行い、これらのコンテンツに隠されている政治的、商業的な意図やジェンダーバイアスを読み解いていく過程は、目にうろこといった感じで私にとっての学びとなった。そんな私が鈴木みどりゼミを選んだのは自然な流れだった。ゼミでは当時、話題となっていた「和歌山毒物カレー事件」の初公判報道の分析を行った。そこでも被告の映像の切り取り方やテロップの付け方、検察側と被告側の冒頭陳述の時間配分などからメディアの報じ方の課題について考察した。鈴木先生からは分析の途中経過を発表するたびに様々な指摘をいただき、新たな視点で考察を再構築していったが、徹夜で作業することもしばしばだった。当時は辛かったはずなのだが、今となっては不思議と楽しい思い出となっている。私は結局、メインストリームのメディアの一員になるのだが、取材の過程で何らかの意図を持って流される情報に少なからず接することもある。鈴木ゼミでの学びは、多角的に取材先に当たり、その情報について報じるべきなのかを判断していく点で今でも大きな糧となっている。

やがて4回生となり、卒業論文のテーマを決める時期に来た。とりあえずゼミの同期2人と共同で作業することは決めたものの、肝心のテーマがなかなか決まらなかった。初夏のある日、ゼミの授業後だったと記憶しているが、鈴木先生が立命館大で客員教授を務めていたガバン・マコーマック氏（オーストラリア国立大学名誉教授）と昼食を取るということで、私たちも誘ってくれた。その席上、開催直前だった「九州・沖縄サミット」の話題になり、マコーマック氏がサ

ミット開催時期に沖縄で開かれる「国際環境 NGO フォーラム」に参加するという話をしていると、鈴木先生が不意に「あなたたちも沖縄に行けばいいのよ」と言い出した。これまでもゼミでの分析作業に対し、予想していない切り口でコメントをいただき慌てることはしばしばあったが、さすがにこの提案には面食らったことをよく覚えている。

一方で、メディアで流されるコンテンツをクリティカルに分析はしてきたものの、鈴木先生がメディア・リテラシーの中で掲げるもう一つのポイントである「主体的にメディアにアクセスして、多様なコミュニケーションを創り出す」という点においては自らの学びが進んでいないことも確かだった。沖縄は返還時に「核抜き本土並み」と言われながらも、全国の米軍専用施設の7割が集中し、また経済の発展も遅れたままになっていた。そんな沖縄でのサミットは概ね好意的に捉えられていたが、当地の人々はどう感じているのか。思いつきのような話ではあるが、現場を歩いて自分たちが見る「現実」とメインストリームのメディアが報じる「現実」にどのような差があるのかということに興味を湧いてきた。

鈴木先生は、メディアを読み解くだけでなく、市民がメディアにいかに関与し、表現していくかということを私たちに実践させたくて、そのような提案をしたのではないかと。そう思うし、そう信じている。実は本当に思いつきだったのかもしれないが……。

急ぎょ沖縄行きが決まり、私たちの卒業研究は沖縄サミットを報じるニュース分析と沖縄での取材を元にしたビデオ作品の2本立てとすることになった。しかし、国際環境 NGO フォーラムの取材以外に現地には何のつてもない。出発の日だけが迫り焦るものの、「とりあえず沖縄に入り、サミットの日程に合わせてイベントが行われる場所やその周辺で市民の声を聞こう」という、計画になっていない計画を立てた。社会人になった今、もし部下がこのような取材計画を出してきたら突き返しているところだが、鈴木先生からは不思議と突っ込まれた記憶がなく、ビデオカメラなどの機材も快く貸し出していただき、サミット時期のテレビニュースの録画も院生の方々に手配してくださった。

実際に沖縄で現場を歩いてみると、サミット開催に期待を寄せる市民がいる一方、サミットに合わせて沖縄の基地問題や環境問題などさまざまなテーマで意見発信を行おうと活動する市民や、沖縄戦や米軍統治、基地依存といった沖縄の様々な歴史的背景からサミット開催に複雑な思いを持つ市民にも出会った。こうした人々の取材をビデオ作品として、また沖縄サミットを報じるニュースの分析結果を論文にしてまとめた。メインストリームのメディアと一介の学生ではアクセス可能な取材先に大きな差があることを差し引いても、メインストリームのメディアが報じる「現実」だけでは見えない「現実」を示せたのではないかと自負する。事前にあれこれ計画して期待通りのインタビューを得るのではなく、実際に現場を歩いて、見て、感じる事が大事なのだということを沖縄の旅で学んだ。鈴木先生は私たちにそうした経験をさせたいという親心で、沖縄行きを提案し、何も言わずに送り出してくださったのではないかと今になって感じる。ここでの学びは今も私にとって仕事をする上で重視している部分であり、今さらながら先生の思いには感謝しかない。

市民が情報発信することが大事だと身をもって学んだ一方で、この時の私には本当にそんな時

代が来るとは確信が持てなかった。私たちが制作したビデオ作品も含めて、メインストリームのメディアとは異なる視点を幅広く発信する「場」がこの時はまだなかったのである。私たちが卒業論文に取り組む少し前、消費者が商品の不具合について大手家電メーカーの東芝とやり取りした音声インターネットで公開し、東芝側が謝罪に追い込まれたことが話題となった。それは、インターネットが持つ可能性を示唆するものであったが、通信環境や機材といったハードルもあり、オルタナティブ・メディアが主流となるには相当な時間がかかると思っていた。

しかしそれから数年後に状況が大きく変わった。2005年ごろには誰でもインターネットで情報を発信し、送り手と受け手が流動化するという「WEB2.0」が提唱され、TwitterやFacebook、YouTubeといったソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）が多くの人に利用されるようになった。技術も発達し、今や特別な機材がなくてもスマートフォンさえあれば、誰でも発信者として社会にアクセスすることができる。これまでのようにメインストリームのメディアではなく、インフルエンサーのような存在からトレンドが発信されるようになった。私もメディアの世界に身を置いているが、状況は劇的に変わったと感じる。個人的には2010年に起きた、尖閣諸島沖における巡視船と中国漁船衝突の件が思い出される。ある海上保安官が衝突の様態を撮影した海上保安庁のビデオ映像をYouTubeに投稿したことが問題とされ、国民の知る権利と機密情報の保護が議論された。そうした論点も重要であるが、それよりも私がこの問題の取材に関わる中でインパクトを受けたのは、当事者自らが直接発信し世に問うことが可能になった現実を目の当たりにしたことである。これまでであればメインストリームのメディアの調査報道などで明らかになる事実が、一市民の発信によって社会に大きな影響を与える時代が来たのだと痛感した。さらに時代が進み現在では、インターネット上での市民の発信を起点として既存メディアが取材を始めることがむしろ当たり前の状況となっている。またSNS上で発信された事件や事故の情報をAI（人工知能）で収集し、報道機関などに配信するサービスも始まっている。これはゲーム・チェンジが起きているといわざるを得ない。

メディア・リテラシーを学んだ立場で考えると、市民がメディアにアクセスし多様な発信ができるという時代はまさに桃源郷ともいえる状況だが、功罪があることも確かだ。例えば近年でいうと、「保育所落ちた。日本死ぬ！」というブログの書き込みに端を発し、保育所入所の待機児童問題が大きな社会問題として認識されるようになった。また、検事総長や検事長らの定年延長を可能にする検察庁法改正案に抗議するためのデモがSNSを中心に展開され、政権が法改正を断念するなど、市民の発信から世論の大きなうねりが起きている。他にも東日本大震災をはじめとする災害時のSNSの有効性など、市民による発信が社会全体の利益につながっていることは間違いない。一方でヘイトスピーチに代表されるように、誤情報や偏った情報がSNSで発信されることで差別が助長されるケース、様々な事象について当事者をインターネット上で誹謗中傷するといった問題も起きている。

夢のような時代でありながら混沌としている現代だからこそ、やはり必要とされるのはメディア・リテラシーの考え方ではないか。その必要性は市民に限らず、メインストリームのメディアで働くジャーナリストにも必須であろう。メディアの発達により取材手法が変わる中、インター

ネット上にある姿形の分からない情報を短時間で吟味することが求められており、あらゆる立場の人々に必要なスキルとなっている。にも関わらず、メディア・リテラシーを世の中に浸透させようという動きが大きくなっているように感じられないのが実情だ。先述したように送り手と受け手が流動化し、誰であっても自由に情報を発信できるという時代が来たと同時に鈴木先生がこの世を去られたのは大きな損失だったと改めて感じる。

ここ数年、SNSをはじめとするメディアを舞台とした様々な事象が起きるたびに「鈴木先生ならこの問題をどのように論じるのだろうか」「鈴木先生ならどのような活動を起こすのだろうか」と考える。しかし残念ながら先生の考えを聞くことはもうできない。私自身もそうだが、今こそ鈴木先生の薫陶を受けた1人1人に先生の遺志を発展させていくことが求められている。